

共働きの父親の育児参加と育児ストレス

— 就学前の子どもを持つ父親を対象とした質的研究 —

○芳澤宏樹¹⁾ 伊藤武彦²⁾ 井上孝代³⁾

(¹⁾ 虎の門神経科 龍医院 (²⁾ 和光大学 (³⁾ 明治学院大学)

キーワード：父親，育児参加，育児ストレス，肯定的感情，3者関係

【問題と目的】 育児に対して感じる不安やストレスは「育児不安」「育児ストレス」として、1980年代から現在まで母親を対象に多くの研究がなされ、母親の育児研究に付随して父親の育児研究も多くなってきている。これまでの父親の育児研究で明らかになっている主な点として、①父親にも育児ストレスがある(冬木, 2005 など)、②父親の育児ストレスに夫婦関係が影響している(住田・藤井, 1998 など)、③仕事と育児のバランスが重要である(矢沢・国広・天童, 1999 など)などがある。しかし、これまでの父親研究は質問紙調査による量的研究が主であり、父親個人に焦点を当てた質的研究はほとんどされていない。質的研究によって個人に焦点をあて、父親の育児研究について新たな知見を見出すことが必要だと考えられる。そこで本研究の目的は、父親の育児参加と父親の育児ストレスについて質的に明らかにすることである。

【方法】 予備調査と本調査を行う。予備調査では先行研究から得られた育児に関連する要因についての実際を確認し、本調査では予備調査で確認された要因、または新たに得られた要因について焦点を絞り具体的に明らかにする。

【予備調査】 4歳の男児をもつ35歳の父親1名を対象に、50分の半構造化面接を行った。面接をする際、調査内容・録音・論文に載せること・守秘義務などについて説明し、了承を得た上で同意書に署名してもらった。先行研究より、質問の内容は「育児ストレスの有無」「仕事が育児に与える影響」「夫婦間コミュニケーション」とした。その結果、父親も育児ストレスを感じているが、それ以上に楽しいといった肯定的感情が強いため、育児に対して強くストレスを感じることはないことが確認された。また、夫婦での会話が、育児ストレス低減要因となっていることや、仕事が育児に与える影響を低めていることが確認された。夫婦関係が育児ストレスに影響していると考えられるため、より詳細な聞き取りを行う必要がある。「育児における肯定的感情」「夫婦の関係性」といった視点が重要であることを予備調査から明らかにすることができたため、本調査ではこれらの視点について焦点を当てることとする。

【本調査】

＜方法＞ 未就学児をもつ父親3名に対し、130分のフォーカスグループディスカッション(以下FGD)を行った。予備調査と同様の説明をし、調査協力者にも面接で語られた情報の外に漏らさないようお願いをした。予備調査で得られた「育児における肯定的感情」「夫婦の関係性」「育児ストレスの有無」について特に重点的に聞き取りを行い、得られた情報をFGDの手法に倣い分類した。

表1 父親の年齢・帰宅時間・子どもの年齢・性別

父親	年齢	帰宅時間	職業	子どもの年齢
A	35歳	21~22時	会社員	4歳(男)・2歳(男)
B	34歳	21~22時	会社員	2歳(女)
C	34歳	19時頃	会社員	3歳(男)・7ヶ月(女)

＜結果＞ 「育児ストレスの有無」に関して、「子どもとの2者関係」についてはストレスを感じていないことが3名全員から語られた。しかし、「妻・子どもを含めた3者関係」になると育児ストレスを感じるものが2名から語られた。「夫婦の関係性」に関しては「ストレス要因」「夫婦での会話」について語られた。特に「ストレス要因」について詳しく聞くと、「妻の子どもに対する接し方」「妻からの要望」「父・母・子の3者関係」の項目が得られた。「育児における肯定的感情」では、「子どもの成長」「子どもとの関わり」について「喜び」「楽しさ」「嬉しさ」といった感情が具体的な内容とともに語られた。

＜考察＞ 父親の育児ストレスに対して「育児に対する肯定的感情」「夫婦の関係性」が影響していることが示唆された。つまり、①育児に対する肯定的感情が強いため育児ストレスを感じていない、②父子関係ではなく母親も含めた3者関係になると育児ストレスを感じるということである。

育児に対する肯定的感情は、予備調査でも得られた項目であり、母親を対象とした研究では育児ストレスとの関連が示されている(住田, 1999)が、父親にとっても育児に対する肯定的感情が育児ストレスを低減させるためには重要であると考えられる。しかし、父親の話を詳しく聞くと、父親によって肯定的感情を抱く育児行動が異なっていることが、具体的なエピソードとともに明らかにされた。さらに、妻・子どもを含めた3者関係になると育児ストレスを感じるという視点は、これまでの研究で明らかにされていない新しい視点である。妻が加わった3者関係で育児ストレスを感じるのは、父親が子どもと直接関わる時、母親と同様養育者として接することになるため、妻からの要望が大きな影響を与えていると考えられる。母親からの要望をストレスと感じないためにも、夫婦での育児に対する考え方の違いを理解するため会話を重ね、その中で父親がどのような育児参加をするべきかを見出す必要があると考えられる。これからの父親の育児参加においては、ただ子どもと接する時間を増やせばいいのではなく、父親が母親との会話を通して、家族の中でどのように子どもと接するかを考えていくことが重要だろう。

【今後の課題】

本研究では父親の育児を質的に研究した。本研究の目的上、父親の条件を表1のようにかなり統制した。それにもかかわらず、①父親の育児に対する肯定的感情と育児ストレスに関連がある、②父子関係ではなく母親も含めた3者関係になると育児ストレスを感じるという点が明らかになった。今後、様々な条件の父親に対して質的研究を行い、条件の違いが父親の育児ストレスに与える影響や、条件にあった父親の育児とはどのようなものかを検討する必要がある。

【引用文献】

冬木春子 2005 乳幼児をもつ父親の育児ストレスとその影響—父親と子どもの関係性に着目して— 家族関係学 24 pp.21-33

(よしざわ ひろき・いとう たけひこ・いのうえ たかよ)